記憶のリトグラフ

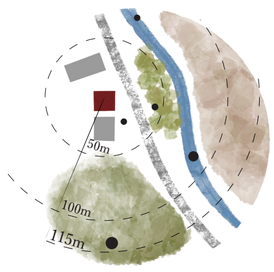
郷愁の堤防による崩れゆくアイデンティティの継承

対象敷地：広島県広島市安佐南区上安萩原地域

01 半径 115m の私的郷愁

土地に宿る記憶

私がこの地で過ごした 16 年の内、一番色濃く残る郷愁として認識しているのは、初めの 6 年間、小学生の頃の記憶である。
当時の私の遊ぶ場と言えば、川・原っぱ・竹藪・道路であり、懐かしさを感じる場所に印をつけると、私の郷愁空間は自宅から半径 115m に蓄積していた。



郷愁空間の崩壊

この郷愁空間が崩壊したのは宅地化により、蓄積した記憶がまっさらに消されたことがきっかけであった。

宅地化とは災害である

この時、私の中で「宅地化」とは、それまである土地に蓄積した個々人の記憶をゼロにしてしまう一種の災害のような行為なのだと認識された。
入居者に恨みはないけれど、何か大切なものを奪われたような虚無感、利己的な嫌悪感が芽生えたのだ。

02 個的郷愁空間

私も誰かの侵入者

懐かしさを感じるきっかけは人それぞれであるが、郷愁空間は誰の中にも存在しうるものである。私が悪とみなしてしまった新規参入者も現在進行形で郷愁空間を捉えている最中なのである。
その点において、私も誰かの郷愁空間の侵入者であり、個々人の郷愁の崩壊という小さな問題は至る所で発生している。

萩原地域における問題

一般的にこの問題は放置され利己的な憎悪感は消えることなく、個々の土地に対する愛着を薄れさせ、私的郷愁を置き去りにして新たな土地へと転移させてしまう。
そして、この問題は対象地域において
「つながりの希薄さ」と「アイデンティティの喪失」という地域の問題にまで発展してきている。

相反する存在

新規参入者には共同体としての意識はなく、逆に既往者にはその想いが強く、前記の侵し侵されの関係と相まってお互いに混じり合うことの出来ない悪循環を生んでいる。

04 郷愁空間の解剖

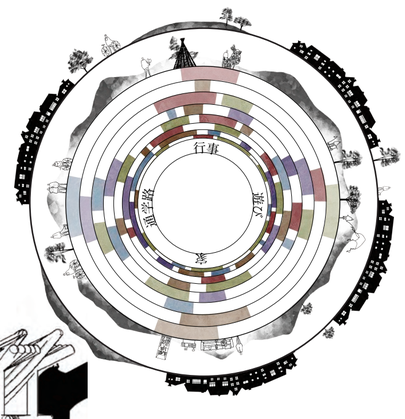
愛着と意識づけ

郷愁の崩壊の問題の解決に向け、深層的に新旧の記憶が入り混じった個的郷愁空間を知ることから始めることとした。
そして、
「個的郷愁を認識しお互いの蟠りをなくすこと」
「個人の郷愁の共有部を認識することで共同体としての意識づけをすること」
を目標に個人の郷愁空間のリサーチを行った。

「郷愁空間＝記憶の蓄積物」

郷愁空間を構築するものは、蓄積する記憶によるものであると位置付け、
さらに郷愁空間を構築した記憶の層を
時間・濃度・感情・回数・動作・範囲の 6 つの要素とした。（図 1）
そして、4 つの評価軸を設け調査し、年代別に個的郷愁空間の分析を行う。（図 2）
4 つの評価軸は、私の郷愁空間が色濃く形成された小学生時代の記憶と関連深い項目を中心に構成し、「行事」・「遊び」・「家」・「通学路」と設定した。

図 1 蓄積する記憶の 5 つの要素



記憶の蓄積による郷愁空間の形成
深層部には古い記憶が蓄積しており、表層部になるほど新しい記憶の蓄積がなされている。表層に近づくに連れて、ある行為に対して影響力のある蓄積物が顕著に現れてくる。
また、これらの蓄積物は宅地化により深層的なものとなったが、未だ姿を変えず残っているものは少しながら確認することができる。

濃度のある記憶の蓄積物
回数による記憶の蓄積物
動作による記憶の蓄積物
感情による記憶の蓄積物
時間による記憶の蓄積物
＋
範囲

濃度のある記憶の蓄積物
ある土地に対して記憶を蓄積させた人数（濃度）を相対的に示したもの

回数による記憶の蓄積物
郷愁空間を構築する際に関わる、ある土地を訪れた数を相対的に示したもの

動作による記憶の蓄積物
郷愁空間を構築する際に関わる、ある土地で行った動きの有無を相対的に示したもの

感情による記憶の蓄積物
郷愁空間を構築する際に関わる、ある土地で非日常的な特別な感情の有無を相対的に示したもの

時間による記憶の蓄積物
郷愁空間を構築する際に関わる、ある土地で過ごした時間の長さを相対的に示したもの